手がかじかむけど氷をつくりたい　年少　つくし組

クラスでくらす

「寒くて手が痛い～」「自転車に乗っているとさ、耳が痛いんだよね」。毎朝、かじかんだ手を温めながら、一日が始まります。２学期の後半から、子ども達はテラスに差し込む光を捉え、模様や色を映し出す遊びを展開しています。加えてこの冬は、氷づくりを楽しみました。砂場のシートの上にできていた氷を見つけ、「これは、ワニの口みたいだ」「剣みたいな氷もある」と大喜びし、今度は、自分でも氷を作ってみたくなったようです。子どもたちはカップいっぱいに水を入れ、園庭のあちらこちらにそのカップを置いていきました。日向に置く子、台の下にそっと忍ばせる子、葉の陰に隠す子など、それぞれが思った場所に期待を込めて置いて帰りましたが、翌朝、確認すると、残念ながら氷になっていませんでした。ところが、隣のたんぽぽ組は、氷づくりに成功し、「なんで？」と子どもたちの中に問いがうまれたようでした。

帰りの集まりの時に、この問いをクラスの子どもたちと共有しました。すると、「お日様があっという間に来ちゃったんじゃない？」「暑かったんだ」「乾いちゃったんじゃない？」「風が当たらなかったんだ」と子どもたちなりに考えを出し、今度こそは！と意気込み、再びカップに入った水を置き、翌日を楽しみに待ちました。

そして、次の日の朝、登園してくるなり「氷ができてる！」と見つけた子が興奮して教えてくれました。「やった～」「できた」「私のもできてる！」。しばらく、氷を光にかざしてみたり、手で触ったりしながら、「今度は、中に木を入れてみようかな」「お花入れてきれいな氷を作る」「色水でもできるかな」と冷たい水の中で、パンジーの花を擦って色をだし、思い思いの氷づくりを始めました。色水づくりは手慣れており、実にいい手つきで絞りだしています。「砂入りも作ってみた！」とＡちゃんは嬉しそうに報告しています。

翌朝も、子ども達の歓声があがりました。「見て！砂も固まった」「字も写ってる（イチゴパックの文字がくっきり）」「ダイヤみたい」「青い氷ができた」と大喜びし、「氷の国みたいだね」とごっこ遊びを始めました。けれどもいかんせん氷です。しばらくすると「もうだめだ～、手が動かない」と子どもたちが入室してきました。お湯を入れた桶を用意すると「温泉みたいで気持ちいい」「でも手がびりびりするね」と手の感覚の変化に気づきながら、暖をとっていました。

大寒の日も、氷を作った子どもたち。「全部凍ってる」と分厚い氷ができていることを喜び、寒さの具合と置き場所の違いで、氷のできあがりが違うことに子どもたちが気づきだしました。

子どもは風の子と言いますが、どんなに寒くても、凧あげをしたり、鬼ごっこをしたりする中で、体が温まっていくことを実感し、自分自身で、上着の着脱をし、体温調節をしています。自然現象の不思議さに出会いながら、自分自身の体の中に起きている変化を捉える子ども達。感じたことや思ったことを言葉で表すようになり、自分なりに考え、仲間の声も聞きながら、行動に移すようになってきました。このことが、粘り強さや探究心をはぐくむことにつながっていくように思います。（教諭・深田美智子）

しらうめようちえん

園だより　2021年度 第10号

白梅学園大学附属
白梅幼稚園
2022年1月31日発行
小平市小川町1－830

11ぴきのねこ、だいかつやく　年中　きりん組

クラスでくらす

３学期に入ってから、お面をつけて劇の遊びを楽しんでいます。「３びきのやぎのがらがらどん」や「こすずめのぼうけん」など、それぞれが好きな役になって、お話の流れに沿って仲間とやりとりしながら遊んでいます。

１月後半から始めたのが、「11ぴきのねこ」のお話です。きりん組の子どもたちは、この絵本シリーズが好きで、１学期にも「11ぴきのねこ」の人形を作り、動かしながら色々なやりとりをしたり、人形劇をしたりして遊んでいました。人形劇で人気だった「11ぴきのねこ　ふくろのなか」のお話を、今度は自分たちがネコになって楽しんでいます。それぞれのお面に描いたネコの表情もとても可愛いです。

「きけん、はしをわたるな」「ふくろにはいるな」などの立て札を読むシーンや、吊り橋を渡るシーン、ウヒアハという怪物に捕まってローラー引きをするシーンと、そこでうたを歌うところなど、お話の中でもお気に入りのポイントがあります。そのシーンでは自然と声が揃ったり、それらしい表現を考えたりと、特に盛り上がっています。ベンチの上を吊り橋のように体をユラユラさせながら歩いたり、ローラーを持ったつもりで「フンニャー」と力を入れて引っ張る真似をしたり、実際にやってみる中で、さまざまな表現が生まれてくるのが面白いです。

トロルやウヒアハなど、いわゆる悪役と呼ばれるような役も人気があり、誰かがやり始めると「やりたい！」と、だんだん同じ役の子が増えていきます。そのような姿からも、仲間と一緒に楽しみたい様子が伝わってきます。その役になりきって表現したり、仲間とお話のイメージを共有したりしながら、楽しんでいるところです。

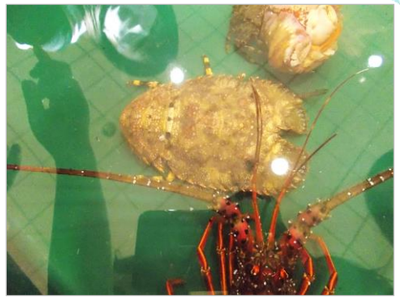
（教諭・大塚美帆）

大学との交流　おさかなワークショップを開きました　年長

11 月と 12 月に、白梅学園短大の宮崎佑介先生とゼミ生のみなさんが「おさかなワークショップ」を開いてくださいました。年長組が参加しました。

● タッチプール〔1日目〕

プールのなかを泳ぐおさかなに触って、体表面の触感やひれのつくり、体の動き、口の動きなど、手の感覚を通して味わいました。初めて魚に触れる子どもが多く、最初は怖がっていた子もいましたが、さかながかまないということが分かると、積極的に触っていました。ふだん、虫探しなど生き物に触れることに慣れている子どもは大胆に触れていました。



● おさかな広場〔2日目〕

おさかなをさばく場面では、じっくりとおろす姿を見せていただきました。予想外の中身に「ぐえ～」と言いながらも、おさかなの体をしっかりと観察しました。のちの振り返りでは、身が 2 枚と骨の部分で合計 3 枚だったことや、骨にも美味しい身(あぶら)がついていることを報告していました。

おさかなを触る体験では、目がぷにぷにしていることに驚いたり、皮をはいでその厚さや丈夫さをなんども確かめたりしていました。また、うろこを光にかざし「富士山みたい」と発見している子どももいました。

園に戻ってきてから、魚の骨や身で作った味噌汁をいただきました。味噌汁は大人気で、何杯もおかわりをし、両クラスとも見事に完食しました。

宮崎先生から

●「タッチプール」と「どこでも魚市場」

川や海に生息する生き物は、残念ながら現代社会では人間が関わりを持とうとしないと接点がなく、分断された存在となってしまいました。しかし、水産資源は食卓を豊かに、観賞魚は精神を豊かにしてくれる存在です。人間社会にとって直接の恩恵がないように見える生物であっても、生態系の「食う―食われる」の関係等を通して安定した自然環境の維持に一役買っているようなものもいます。

植物や虫と異なり、ふだんの保育や家庭の生活の中で縁の薄い水の生き物の多様性とその魅力に色々な感覚器官で感じられる機会となっていれば嬉しい限りです。かくいう私も、幼少期の魚との出会いを契機にその魅力にはまり、彩りある豊かな人生を過ごせていることを実感しています。

研究室から　市民の情報を科学的発見に役立てる

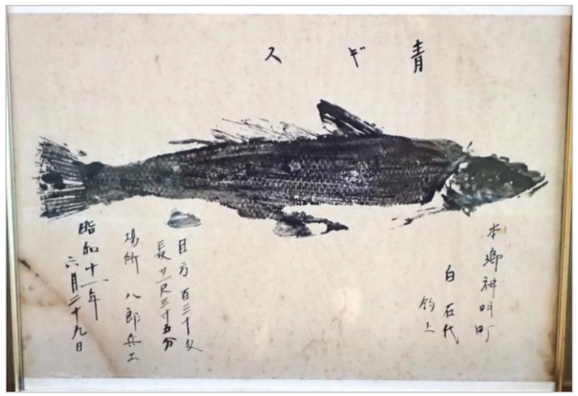
宮 崎 佑 介
白梅学園短期大学准教授

スマートフォンや SNS の発達により、気軽に位置情報付きの高解像度の写真や動画を誰もが発信できるようになりました。この ICT の変革は、生物の研究の発展にも役立っています。たとえば、釣り人、漁師、ダイバー等が気軽に魚の分布データを証拠資料付きで紹介できるようになったことから、これまで情報が限られていた魚類の分布や色彩情報等の共有が急速に充実してきました。

ひとつの研究事例としては、WEB 魚図鑑のさかな BBS というコミュニティの投稿内容を分析したところ、特に外来種の新しい分布情報が取得しやすいことがわかりました。実際に、Twitter の投稿内容から国内で初めて特定外来生物に指定されるブルーギルの違法放流の発見に繋がった事例もあります。このように、市民が何気なく SNS で共有した内容が専門家の目に留まると、社会的・学術的な貢献に繋がることを実証してきました。

最近では、過去の市民が保有していた情報にも対象を拡げ、魚拓の情報収集を行っています。東京湾では既に絶滅したと考えられるアオギスの追加となる分布記録の証拠資料として、これまでに新たに 3 枚のアオギス魚拓を「船宿 吉野屋」さんから再発見することができました。加えて、釣り雑誌にアオギスを紹介する連載記事をご覧の読者から千葉県大貫産アオギスのカラー写真を提供いただきました。アオギスは、東京湾では 1976 年の記録を最後にまったく採捕されておらず、個体群絶滅が強く疑われています。この読者提供のカラー写真は、アオギスという種としても最古のもの、なおかつ東京湾のアオギス個体群としては今のところ唯一のものとなることがわかりました。

過去の生物多様性情報は、タイムマシンが無い限りは取得できない情報です。このような市民の保有する情報等から抽出する作業が、数少ない過去の生き物の情報の解像度を上げてくれるのです。さらに、釣り雑誌の分析から、ある程度の水産資源の動態変化についても情報が得られないか試行中です。



千葉県浦安市「船宿 吉野屋」さんのアオギス魚拓。
東京湾ではアオギスは絶滅した可能性が極めて高い。